

キリスト教神学における歴史認識

ーラインホルド・ニーバーによるカトリック神学についての 見解ー

Views on History in Christian Theology: Reinhold Niebuhr's Perspective about Catholic Theology

佐久間 重
Atsushi Sakuma

本論は、ラインホルド・ニーバーが彼の著作『人間の本性と運命』の中で神の「恵み」についてどのように解釈しているかを詳述したものである。ニーバーの解釈を通じて、キリスト者ではない人にとっては難解なキリスト教神学を解りやすくすることを狙いとしている。ニーバーは、古代ローマ時代から中世に至る中でキリスト教の教義、特に福音についての解釈の変遷を見て、人間の完全さへの認識が強められた、と述べている。ニーバーによると、アウグスティヌスはヘレニズムの思想の影響を受けて、罪を意志の欠陥、つまり善いことを行おうとする力の欠如として捉えた。この考え方が人間は自らの力は認めつつ福音からの謙虚さを併せ持つとされた中世の「カトリック的統合」を生み出したが、この統合は後に宗教改革とルネサンスの挑戦を受けることになった。

This paper deals with the meaning of grace according to Reinhold Niebuhr's description about it in his famous book, *The Nature and Destiny of Man*. As the concept of grace in Christianity is difficult to understand for non-Christian people, it may be useful to show how Niebuhr interprets grace. Niebuhr says that the concept of complete man had been accepted in Christianity, while it had become prevalent religiously and socially in the ancient Roman Empire and later Middle Ages in Europe. According to Niebuhr, Augustine, influenced by Hellenistic thought, conceived sin as a defect of the will, or as a lack of power to do good. The admixture of Hellenistic thought in Augustine's doctrine of sin contained the roots of his error in the doctrine of grace. Based on Augustine's idea, the Catholic synthesis was formed. As the Catholic synthesis blunted the original sin of man as well as the completeness of man, it was to be challenged by the Reformation and the Renaissance.

キーワード：恵みの意味、ラインホルド・ニーバー、アウグスティヌス、カトリック的統合、ルネサンス
meaning of grace, Reinhold Niebuhr, Augustine, Catholic synthesis, Renaissance

I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする。ニーバーは、新約聖書、特に聖パウロの言葉を基礎にして「恵み」を解釈した。^{注1)}ここでは、初期キリスト教、さらにローマ・カトリック世界における、「恵み」の解釈についてのニーバーの見解を見て行くことにする。以下ではラインホルド・ニーバーの論述を詳しく紹介することにする。^{注2)}

II. 中世以前の「恵み」の解釈

1. 福音の解釈の変遷

恵み (grace) と生活についての解釈に関する聖パウロの意義として、ニーバーは、生活と歴史の問題への聖パウロの解答を取り上げ、人間の歴史を単なる預言として解釈することは否定しても、預言的期待を込めたイエスの解釈は肯定したことを指摘する。イエスの解釈では、正義であると言われるものも神の審判以前では正義ではなく、苦悩するメシアが正義と憐れみを啓示している、とされた。

ニーバーは、キリスト教が古代ローマ時代から始まり、ヨーロッパ世界の中で支配的になって行った時代におけるキリスト教の教義、特に福音についての解釈の変遷を見る。そこでは、人間の自尊心がキリストの福音に抵抗しているのが解る。キリスト教がまだ少数派であった時代では、メシアは期待されたが、神の正義と憐れみを擁護するメシアは期待されなかった。キリスト教が支配的になった時代では、キリストを通じて正しいものとなった人間を擁護することになった。キリストの福音への抵抗は、様々な形を取っていた。ニーバーによると、キリスト教神学者が、人生と歴史に関する福音の解釈に現れる逆説を曖昧にしたが、そこに共通してある動機を探ることが重要になる。その動機になっているのが、新しい信仰生活においても世俗の変化から逃れる道がないことを人間は認めたくないことである。そこで、キリストにおける神の啓示を歴史における永遠の開示として解釈する方法を採った。そして、キリスト者を歴史的なものから永遠のものとして解釈するようになった。こうした真理の捉え方は、人生の中で完全さを達成出来るということを仮定するようになった。

キリスト教の福音に対する反発が、西欧文明の歴史を歪め、様々な偏教主義を導いた、というのがニーバー

の西欧の歴史の見方である。この反発の中では、キリスト教の真理の一つをキリスト教の真理全体に対立させる方法が採られた。この反発は、西欧文明がなぜ儒教や仏教の視点からすると大きな野心の文明に映るかを説明する。人間の創造性を強調する神学が興隆しなければ、人間の自尊心によってキリスト教の真理が曇らされることが避けられたと言う訳ではない。信仰のみで人間や神の真理を理解しようとする宗教でも、人間の傲慢さの手段に使われてしまうことを認識することが必要になる。

ニーバーは、人間の傲慢さを次のように述べている。信仰によって得られる真理を、人間が確実な所有物として見なす時は、その真理が常に傲慢さの手段にされ、人生の有限さが克服されたという見せかけの手段になってしまう。新約聖書は、福音の誤用がいかにも避けられないものであるかを説いている。歴史の終末に現れる偽キリスト達についての新約聖書の記述は、このことを現している。キリスト教の歴史が持つ悲劇的側面は、新約聖書によく表現されている。中世キリスト教の歴史では、教会は美德によって悪徳を凌駕出来ることを証明しようとして、罪人達の嘲りを克服しようとして来た。キリスト教が、人生や歴史の真理を保証出来るのは、キリスト教も間違った真理の道具として使われることがあることを理解できるときのみである、とニーバーは述べる。

2. 「恵み」についてのアウグスティヌス以前の捉え方

ここではニーバーの記述に従い、福音の真理への抵抗を、使徒の時代からアウグスティヌス (354年～430年) の時代まで見て行くことにする。この時代には、苦悩するメシアが正義と憐れみを表すと言う聖パウロの考え方が不完全ながらも理解されたが、その背景には、ギリシャ・ローマの文化に対抗する必要性があった。ギリシャ・ローマの文化は、永遠の問題を人生の中心の問題と捉えて、様々な神秘的宗教や哲学によって永遠に至る方法を探求した。当時のキリスト教信仰の中でも、神性と世俗性とに二分するヘレニズム的な思想に対抗するだけの力はあったが、歴史的現実の中にある罪の問題を明確にする力はなかった。キリスト教の歴史の早い時期から、洗礼が罪を信じる人を癒すとする考えは取られていたが、使徒教父でも罪の問題を深い次元で考えることはなかった。永遠の人生についての考えが、福音の意味の大部分であると捉

えられた。使徒教父に続く、護教論者の中でもこの考え方に変化はなかった。護教論者の一人は、プラトンのようなイデア論には傾倒しなかったが、人間は真理に達する内的能力を備えていないので、その能力は神の恵みに依る、とした。人間は真理に達する能力を備えながらも、それを発揮する力がないという逆説を理解しなかった。罪の赦しという聖書の中の考えも否定はされなかったが、それは過去の罪を赦すという狭い捉え方がされた。人間にとっての正義 (justification) を神の裁可 (sanctification) に従属させるカトリックの思想は、早い時期にその起源があった。

3世紀のローマ属州カルタゴ出身のテルトゥリアヌスの考え方は、罪の問題を考察する時に特に意味を持つ。彼は、預言的、終末論的な歴史の解釈を保持しようとし、罪の救済を考えた。彼は、原罪という教義は理解したが、神の正義と憐れみの理解では混乱し、神の赦しを非合理的と見なすようになった。キリスト教により人間が永遠を獲得するという考え方の傾向は、西方の教会より東方の教会で顕著であった。アウグスティヌス以前で最も偉大な東方の神学者といわれるエジプト生まれのギリシャ人のオリジェン (185年頃～254年頃) は、神聖さを勝ち取る方法として、人間の完全主義や道義性を強調した。この傾向は、キリストを通じての人間の神格化を説いたアレクサンドリアのクレメント (150年頃～215年頃) やニッサのグレゴリー (335年頃～394年頃) の主張にも現れていた。

聖書的、聖パウロ的な罪の概念は、2世紀に活躍したトルコ生まれの教父イレナエウスや4世紀のアレクサンドリア生まれのアタナシウスのようなヘレニズム主義を取るキリスト教指導者の考え方の中にも現れているが、彼らが罪と恵みについての聖書的な概念を十分に理解していたとは言えない。アウグスティヌス以前の教会が、信仰による義という聖パウロの考えを受容したことはないという近代の歴史家の主張は、真実に近いことである。アウグスティヌス以前は、人間と神の同一化による救済を説く「グノーシス」というギリシャ的概念が支配的であった。ギリシャ哲学に影響されたキリスト教は、福音がより高度な形の知識になるというヘレニズムの伝統に従った。ギリシャのキリスト教がより聖書的になると、「恵み」や「力」の必要性を認識したが、預言的、聖書的思想の中で考えられるような人間の歴史的存在の問題を十分に理解することはなかった。完全主義的幻想は、コンスタンティノーブルの大司教を務めたヨハネ・クリソストム (347

年～407年) の思想の中に現れている。彼は、神の恵みを洗礼の儀式に限定した。ローマ教会の思想は、東方教会のもの程完全主義的ではなかった。東方教会の思想は、今日まで変わらずに続いている。これは、ヘブライ主義に対するヘレニズムの文化的勝利を表している。東方教会は福音の意味への十分な探求はしなかった。

III. 恵みについての中世カトリック教会の考え方

ここで、ニーバーは、使徒達の時代から、4世紀から5世紀にかけての考え方をアウグスティヌス (205年頃～270年) の見解を中心にして述べる。アウグスティヌスは、キリスト教会の中での主要問題として、罪と恵みとの関係を取り上げ、永遠と時間との関係はそれに従属する問題であるという考えを明確にした。彼以前の時代では、預言的、聖書的な概念は曖昧にされた。原罪についての聖パウロ (5年頃～67年) の考えをアウグスティヌスは練り上げたことにより、有限さが克服されたという見せかけが歴史に混乱と悪をもたらすことが十分に意識されるようになった。

アウグスティヌスの思想の中には、理念 (イデア) を神秘的に捉える新プラトン主義の影響が見られ、聖書の福音が曖昧に捉えられた。アウグスティヌスは、罪を意志の欠陥、つまり善いことを行おうとする力の欠如として捉えたが、これはプロティヌスの思想から来ている。アウグスティヌスの罪についての考え方の中に、ヘレニズム的思想が入っていることが、恵みについての教義に間違いが生まれた原因である。

アウグスティヌスの恵みについての考え方の特徴として、ニーバーは、力としての恵みと赦しとしての恵みとの間の関係を曖昧にしたことを指摘している。アウグスティヌスは、両者の間の関係について、神の赦しと裁きという伝統的な考えを受け入れた。この考えに従えば、神の憐れみは人間と神との間の対立を解消し、人間の自己愛を服従へと変えることになる。それにより、魂は恵みの中で成長し、より高い浄化の段階に到達する。裁きを浄化に従属させることが、生活と歴史についてのカトリックの概念全体を規定している。ここに、新たな自己正当化と、人間が生活と歴史を完成出来るという新たな見せかけが生まれる要因がある。

カトリックの考えとヘレニズム的な考えの違いは、人間が自分の力だけでは善いことを実現出来ないことを意識している点をカトリックは明らかにしているこ

とである。アウグスティヌスは、意志を持つのは人間だが、善いことを意識させるのは神であるとしている。アウグスティヌスは、信仰に目覚めた新しい生活の中でも自己愛の力が続くことを十分に理解していなかった。アウグスティヌスは、人間のような有限なものは究極の目標に到達出来る可能性がないことは認めたが、その目標を目指そうとすることでは完全であり得ることを確信していた。彼は、キリスト者が罪を免れていることを肯定せず、罪を完全に克服することが不可能であることを認めて、神の赦しが人間の最後の瞬間まで必要であるとしていた。しかし、アウグスティヌスは、救済の後に現れる自己愛は偶然のもので、本質の現れではない、と考えていた。ニーバーにとってカトリックの思想で重要な点は、赦されざる罪と赦される罪を区別していることである。慈善を行うことによって罪が浄化されるという考えは、仕事によって善きものになることが神の恵みとして理解されることに結び付くことになる。

アウグスティヌスの概念でニーバーが問題にしている点は、罪の克服が自己愛の克服になるかどうかであり、アウグスティヌスも彼以降のカトリックの人達もこのことを論じた。克服されずに残った罪は、気まぐれな欲望を引き起こすと考えた。現実の生活の中で、人間は自己愛にある悪を知り、神の愛により自己愛を克服するが、それでも利己的になることがある。純粋な愛は、「信仰による」のであるが、現実の行動では自己愛と神の愛を混同している。こうした精神面での悲劇的特質は、宗教改革の時まで明確に理解されることはなかった。アウグスティヌスは、このことを理解せず、彼の恵みについての考え方はカトリックの教義の根本になり、罪についての考え方は宗教改革の根源となった。

宗教改革の教義の中で一番意義のあることとしてニーバーが指摘するのは、人間の状況にはパウロ的、聖書的分析でも、アウグスティヌス的分析でも解決できない深刻な問題があることを明らかにしていることである。人間集団や個人の歴史状況についてのアウグスティヌスの説明は、条件付きの完全主義という限界の中にあっただ。歴史の中で人間の抱える矛盾は、自己を軽蔑する程に神の愛により活気付けられ、他方、神を軽蔑する程に自己愛によって活気付けられていることである。アウグスティヌスは、この二つの愛が歴史の中で混ざり合っていることは認めており、相対的正義の問題には単純な完全主義的解答は出すことはな

かった。ただ、全体としては、歴史上の教会において真の正義が見出せると主張した。アウグスティヌスは、この主張に様々な条件付けをしたが、彼以降のカトリック教会は、彼程には慎重になることはなかった。

アウグスティヌスは、実際の教会とあるべきとされる教会とを区別していたが、多くの場合、教会を地上の神の国とした。教会の完全さを認めるアウグスティヌスの考え方は、聖人の完全さの考え方に対応していた。そのために、アウグスティヌスは、教会も神の審判の下にあることを認識できなかった。彼にとって、教会は、歴史的なものとの間の矛盾が克服される歴史的な場所であった。教会は神の審判の下にはなく、キリストと共に支配するものであった。そのために、アウグスティヌス以降のカトリック教会では、原罪を否定するペラギウス（354年～420年）とその一派の教義が支配的になった。

恵みについてのアウグスティヌスの考え方とカトリックの教義は一体のものになっていて、罪は人間における神のイメージの破壊ではなく、本来の完全さの喪失として捉えられ、この不完全な特質を完成するものとして恵みが理解された。歴史の中にある人間についての分析では、トマス・アクィナス（1225年～1274年）によって完成されたカトリックの教義より、アウグスティヌスのものの方が聖書的逆説の要素が強く見られる。しかし、ニーバーは、恵みが何を成し遂げるのかについては、アクィナスとアウグスティヌスとの間には違いがない、と見ている。両者の考え方の中では、歴史の中の人間についての聖書的な見方が、人間の合理的力を認めるギリシャの古典的見方を圧倒している。カトリックの立場では、人間が善いことを行うのは恵みを通じてのみとなっている。しかし、救済された人間は歴史の罪を克服するとするために、ギリシャの古典的見方に近い。この見方の中で、神の審判は赦しに従属することになり、赦しが過去の罪に必要とされるという考えに結び付いてしまう。

人間の善さについてのこうしたカトリックの見方の究極のものとしてニーバーが挙げるのは、最後の審判では人間は自らが持つ長所によって救われるという信仰である。人間は、その長所を神の恵みによって得られることになる。この点では、アクィナスとアウグスティヌスは、同じ意見である。アウグスティヌスは、人間の永遠の生活は善い行いへの報いとして与えられる、とした。ここで、神の審判に対峙する人間の心持ちが問題になる。もし人間が平穏な気持ちで神の審

判を受けられるとしたら、全てを統治する意志と力に人間の意志を調和させることが出来ることを意味するが、これについて、カトリックは肯定的である。

このような主張をさらに拡大して、恵みによる人間の完全さを主張するカトリックの神秘主義者が出て来た。この中世の思想が、近代の完全主義の源泉の一つとなった。ここでニーバーが重要であるとするのは、人間は自らの生活と歴史を完成出来ないとする聖書的な見方と、人間には自らの限界を超えることが出来る能力があるとする古典の見方とのバランスを保つカトリックの教義を認識することである。人間の限界と能力とを統合するカトリックの見解を、多くの指導者が明らかにしていた。12世紀に修道院を設立したクレルボーのベルナルド（1090年～1153年）は、人間は自然状態で必然からの自由を、恵みの中で罪からの自由を、神の栄光の中で悲惨さからの自由を得ている、と主張した。この主張を敷衍すると、歴史における生活の完成と歴史を超えたところでの生活の完成との違いは、単に有限さへの従属の有無でしかない、ということになる。

人間の限界と能力を統合するカトリックの教義から逸脱した主張は、16世紀に開かれたラティスボンの公会議で作られた教理の中に見られる。宗教改革の教義に合わせるために、人間は正しい行いのために神に受け入れられるのではなく、キリストの徳によって救われる、とされた。宗教改革の教義との妥協の余地がなくなると、カトリック教会は1545年に開かれたトレントの公会議で主張を変えた。人間の善き行いは、神の賜物でもなく、人間の徳の結果でもない、という見解を出した。そして、人間の実際の姿とあるべき姿との間には矛盾はない、とした。カトリックの思想では、赦しとしての恵みと力としての恵みとの一致、つまり、救済された人間の無罪性について疑念を残していない。

カトリックの恵みについての教義は、カトリックの神学の基礎であり、生活と歴史についての聖書的、預言的見解は付帯条件として取り入れられ、罪を本来の完全さの欠如としての定義がされている。人間の置かれている状況が聖書の記述通りであるとしても、カトリックでは、その状況を解決するために人間の可能性の限界に挑み、罪が克服されるところが歴史の中に求められた。救済された人間の無謬性を過大評価することをニーバーは、カトリックの過ちであるとして、それがカトリック教会の教義全体の中に現れている、と

した。そこでは、アウグスティヌスが付けた条件が忘れられていて、教会と神の国とが同一のものとされ、教会が恵みを行う唯一のものとされている。ローマ教皇には「キリストの代理人」のいうタイトルが与えられている。これは、預言的歴史観からすると神への冒瀆になる。

以上のことから、宗教改革で教皇が「反キリスト者」と見なされたことは、歴史的に不可避のことであった。ローマ・カトリック教徒以外のキリスト者にとって、教皇を頂点とする教会組織はローマ・カトリックの教義の本質の腐敗に見える。アウグスティヌスは、キリストと共に統治する聖人達を考えたが、ローマ・カトリックではこの言葉から政治的支配権が考え出された。教会の神聖化は、精神的な腐敗を生み出す。教会は神の顕現であるとするカトリックの教義は、教会は「キリストの体」であるという聖パウロ的、聖書的教義から大きく逸脱して行く。「体」であると言う時には、歴史的現実の様々な法則に従属していることを表す。そして、教会のメンバーはすべて「頭」であるキリストに従属することでもあり、互いに統合されるのが理想であるが、現実の教会には様々な矛盾が現れた。

歴史の中で競合する多くの政治的勢力の一つになる「キリストの代理人」は、歴史の中では力がなかったキリストの真の代理人にはなり得ない。ローマ教皇の権力は、競合する社会的勢力を超越して、西欧社会で独創的な役割を演じられるようになったとしても、ローマ教会が腐敗から免れ得ることを保証することではなかった。ローマ教皇の行為の中には「キリストの精神」と「シーザーの才能」が混ざり合っていたことを歴史は明確にした。ローマ教会による西欧経済の支配は、教会と封建勢力の結び付きの結果であり、新興の中産階級の人達が、宗教的権威に挑戦しない限り、教会の支配は変えられないと考えるようになった。

ローマ教皇によるヨーロッパへの影響力の拡大は、一方では、世俗の国家の意向を「キリストの法」の下に置こうとする努力であったが、他方では、世俗の帝国に対抗した政治的支配権の主張でもあった。しかし、この支配権は、教皇の不安定な力のために十分なものではなかった。そこで、教皇は、「世俗の」外交的、政治的戦術を行使した。この戦術は、最終的には神聖ローマ皇帝に対抗して、新興のフランスの力を利用することになった。この戦術は、教皇の力の中にある宗教的な見せかけへの反発を招き宗教的に失

敗し、フランスの利権への教皇権の服従という政治的な失敗を招いた。ヨーロッパの文化に対するカトリックによる宗教的支配は、政治的支配と同様の矛盾を現した。それは、一方では、科学、哲学、文化のすべてを聖書の真理の権威の下に置こうとする努力であったが、他方では、聖職者達が自らの信仰を、他の知識に対する権威の手段に変えようとする自惚れの現れでもあった。

カトリックの教義に基づくこうした展開を、ニーバーは、人間の自尊心が福音の真理に対して抵抗した結果と位置付ける。この抵抗は、キリストが現れる前に、救世主への希望が挫折する中で既に明らかになっていた。救世主への希望を抱く人には、苦悩する救世主という考えは受け入れられないものであり、イエスの弟子達でも受け入れ難かった。また、罪の問題への解答として不完全な人間生活の改善を示した初期のキリスト教会にも受容しがたい考えであった。

力としての恵みと赦しとしての恵みという二面性は、宗教生活の複雑さを表している。信仰と恵みによって、人間は歴史が持つ矛盾を超えることが出来るが、多くの人は、信仰と恵みを享受することが簡単でないことを理解出来ない。それでも、歴史の矛盾を超越するための努力は、キリスト者の生活では避けられないものである。そして、この努力がキリスト教会を新しい罪に巻き込むことも、同様に避けられないものである。

IV. カトリック的統合の崩壊

ここで、ニーバーは、カトリック神学に対する宗教改革とルネサンスの挑戦を分析する。中世キリスト教では福音の真理が十分に理解されることがなく、歴史的な反発が生じた。これが宗教改革であり、ここで、歴史の中での人間の業績の限界を指摘する福音の側面が広く知られるようになった。「信仰による義」という宗教改革の教義は、人間の生活や歴史を完成させようとする努力を最終的に放棄することを表した。それは、歴史の預言的な解釈の開花でもあった。人間の歴史は自然の流れと永遠の目的との中間にあることが理解されるようになった。この状況から逃れようとする人間の努力は、人間につけられている条件を曖昧にするプライドの罪に巻き込むことになる。人間が神の恵みによりこのことを知っても、罪から免れることを保証するものではない。

宗教改革の教義では、人間は「信仰による義」と「希

望の中での救い」を受けるとされてた。人間の力の中ではなくて、人間の理解を超えたところで、生活が完成されることを期待しなければならない、とされた。人間の存在は、人間の自由を否定して自然に回帰しても、「永遠」に到達するために被造物としての特質を放棄しても、救われることがない、とされた。そして、信仰と希望によるしか、人間存在の謎は解かれぬ、となった。信仰と希望による解答がなければ、人間生活は、一方では懐疑主義により、他方では狂信主義により脅威に晒されてしまう。

人間は自らの力への自信と福音からの謙虚さを持つとする中世の「カトリック的統合」は、ルネサンスの精神によっても挑戦を受けた。近代の精神生活は、宗教改革とルネサンスの二つの力の交流によって形作られた。近代の文化史の中では、これら二つの運動が相互に関連付けられることがなく、同時期に起こった、教会の支配からの解放のための二つの運動と捉えられている。ニーバーは、ルネサンスは、宗教改革より2世紀位前に始まり、さらに、ルネサンスはカトリックの中核の中で発展した、という立場をとる。15世紀のヴァチカンの宗教指導者の生活が、ルネサンスの精神の中心であった。その意味で、ルネサンスは宗教改革よりカトリック的であり、より近代的であった。このことを理解するためには、ルネサンスと宗教改革が互いに矛盾する歴史的勢力を代表していたことを知る必要がある。

ルネサンスにとっては、人間状況についてのカトリック的な解釈は余りにも悲観的であり、宗教改革にとっては、カトリック的解釈は余りにも楽観的であった。カトリック的統合は、全体として楽観的な人間の解釈を行って、ルネサンスとカトリック的統合の間には、宗教改革とルネサンスとの間よりも、さらには、宗教改革とカトリック的統合との間よりも類似性を多く持っていた。カトリック的統合に見られる人間生活の完全さへの見解とルネサンスの見解には連続性がある。他方、宗教改革は、中世のカトリック的統合の伝統とは全く断絶していた。宗教改革では、人間の中にある神の力としてではなく、人間に向けた神の力として「恵み」が解釈され、人間の個人生活も歴史全体も、カトリック的統合の見解程には完全さを持ち得ない、と考えられた。

ルネサンスの中では、人間の理性の自立の名の下でキリスト教会による文化生活の支配への抵抗が生じた。宗教改革では、聖典の権威の下で、ローマ教会に

よる宗教思想の支配へ抵抗が生まれた。これら二つの抵抗は、全く異なった経験から出て来た。ルネサンスの抵抗の中では、人間の究極的な問題は余り意識されないで、人間の有限さは人間の考える力の拡大で克服出来る、とされた。有限さと自由という人間が持つ逆説が、より深刻な問題を導くとは考えられなかった。それでも、教会の権威への抵抗は、それ自体では有効なものであった。ルネサンスの最大の成果は、人間の合理的な探求心を自然科学の興隆へと導いたことであった。自然の研究の中では、人間の知性が神のような客観性に近づけるからであった。他方、人間の歴史を研究する時には、純粋な知性ではなく、不安な自己と結びついた不安な知性で物事を観察してしまうことになる。

教会の権威に対する宗教改革の抵抗は、人間の究極の問題に関してであった。宗教改革においては、歴史についての不完全な意味を全体の領域に当てはめることが世界に悪を生じさせると解釈され、ローマ教会による宗教的教義への支配を偶像崇拜の新しい形として考えられた。神の恵みは、人間が自らの限界を認識する時のみ作用する力であるが、ローマ教会は、この恵みを必要としないとして、生活や歴史の中心に立った。ローマ教会の権威に反対して聖典の権威を主張したのが宗教改革であったが、宗教改革の中にも新しい形の偶像崇拜の危険性が潜んでいた。宗教改革の聖書中心主義は、人間の心の自由に対して、古い宗教的権威と同じぐらいの危険性を持っていた。本来の聖書の権威とは、すべてが成就される福音の真理を意味している。聖書は、人間の企てが限界に直面し、その限界を打ち破ろうとする時に、神の答えへと導くので、権威を持つのである。

当時の権力への抵抗から生まれたルネサンスと宗教改革の中で、人間の自由についての概念は異なった展開をして行くが、生活についての概念程には違くない。ルネサンスは、過度な社会的、政治的、宗教的支配から人間の知識の探求心を解放することを目指した。その意味で、ルネサンスは、近代を特徴付ける自由を求めた運動の源泉である。宗教改革では、干渉を受けることなく神の恵みを認識する権利と能力として、自由の意味が解釈された。神の恵みを無しで済まそうとするローマ教会の宗教的権威が、社会状況の中でも究極の権威を主張したために、宗教上と社会的な自由を求めた運動が合流し、互いを支援することになった。この様にして、ニーバーは、自由を求めた運

動の異なった形として、ルネサンスと宗教改革を解釈することに一定の正当性を見出している。

ルネサンスと宗教改革の宗教的権威への抵抗での原理的な違いとしてニーバーが指摘するのは、キリスト教の恵みについての教義の中にある「赦し」と「正義」の捉え方の違いである。ルネサンスは、「赦し」の特徴を持っていて、人生の成就に対する預言的な留保が取り除かれている。このために、ルネサンスは近代の人間の精神を形作った。ルネサンスは、「正義」と「赦し」という逆説を打ち破っただけでなく、「恵み」という考え方も放棄した。ルネサンスでは、善きことへの知識とそれを行う能力との間の溝を認めず、人間は自らの中に人生で最高の目標を達成する能力を持っている、と信じられた。

ルネサンスに見られる完全主義は、ギリシャの古典的人間解釈に基づいているが、聖書の要素をその世界観に加えている。人間の歴史がより高い可能性の実現に向かっていくという考え方は、聖書の終末論から派生したものであった。しかし、ニーバーは、ルネサンスが歴史についての聖書的な概念を次の二つの点で大きく変えた、と言う。第一に、ルネサンスは、歴史の成就を歴史を超えたものとしては認識しなかったことである。第二に、最後の審判を終末論にある「終末」の一部としては見なさなかったことである。そのために、ルネサンスの精神は、近代のユートピア思想を導くことになった。「進歩的思想」は、ルネサンスから出て来た歴史哲学である。

このような結果は、人間へのギリシャ的信頼と、歴史の意味への聖書的信頼の統合の結果である。しかし、これでは、預言的見解よりも単純な意味しか歴史に与えられない。今日の人間にとっての課題は、ルネサンスの世界観の中で過ったものを排除し、正しいものを受け入れることである。ルネサンスは、ギリシャ思想、カトリックや宗教改革の思想よりも明確に、人間の歴史が無限の可能性で満ちていることを把握していたが、そこには善と悪の無限の可能性が含まれていることを認識していなかった。人間の理性や社会が発展すれば、悪を克服出来る、としていたが、人間の新しい可能性が秩序ばかりでなく、混乱の手段になること、つまり、歴史が自らの問題解決の方法を持っていないことの認識がなかった。

一方、歴史の悲劇的側面を十分に理解していたのが、宗教改革の思想であり、歴史の可能性を単純に信頼したカトリックやその他のキリスト教思想に対する反論

となった。「信仰による義」という宗教改革の教義は、歴史についての適切な解釈を含んでいた。歴史を考察するほとんどのプロテスタント神学は、宗教改革ではなく、ルネサンスの論理を基礎としているために、歴史の意味を十分に理解出来ないのである。他方、宗教改革の中での歴史の究極問題の理解の仕方は、道義的な敗北主義に向かう傾向があった。宗教改革では、人間が直面する究極の挫折が意識されたが、その問題の十分な分析は行われなかった。ニーバーは、その分析から出て来るものが神の「赦し」であり、人間に無限の可能性への道を開く、としている。

宗教改革が持っていた道義的悲観主義や人間の可能性への無関心を、宗教改革がルネサンスの勢いに負けてしまった一因としてニーバーは指摘して、このことが近代の精神性を決定付けた、としている。科学や社会の仕組みが発展すると、ルネサンスの持っていた生活の見方の正しい面が強調され、間違っていた面が覆い隠されてしまった。近代の人間が置かれている状況を正しく把握するためには、ルネサンスや宗教改革をもっと深く検証する必要がある。ルネサンスと宗教改革とでは対立した、人間の本性の見方を理解することが重要である。中世のカトリック的統合の中では、この対立は曖昧にされていたが、この対立を克服する見方が出来れば、近代の文化が陥りがちな悲観主義か楽観主義のどちらか一方への傾斜を避けることが出来るようになるというのがニーバーの提言である。

V. おわりに

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第五章を中心にして、神の「恵み」が初期キリスト教世界や中世キリスト教でどのように捉えられてきたかについてのニーバーの見解をまとめてみた。これにより、キリスト教神学とはどのようなものなのか、また、ニーバーの神学の特徴はどのようなものなのかの一端は紹介出来たと思う。ニーバーの思想はまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後も続けて行くつもりである。

注

- 1) 佐久間重, キリスト教神学における歴史認識, ーラインホルド・ニーバーによる「恵み」の意味の解釈についてー名古屋文理大学紀要第8号(2008年3月)参照.

- 2) Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man*, II , Charles Scribner's Sons 127-156 (1943) を参照.